

# ランドスケープデザインと景観計画

村上 修一

環境建築デザイン学科

担当する専門科目「ランドスケープデザイン」(Landscape Design)と「景観計画」(Landscape Planning)の実施にあたって、筆者は3つの原則を設けている。それは、実践形式で行うこと、設計演習のサポートに徹すること、ランドスケープの作法がわかる建築の専門家を育てること、である。

## 1. 実践形式で行うこと

「ランドスケープデザイン」の到達目標は、「講述する手法を用いたランドスケープデザインができるようになる」ことである。また、「景観計画」の方は、「講述する手法を用いたランドスケーププランニングができるようになる」ことである。つまり、受講生が手法を知って理解することだけを目指すのではなく、手法を実践できるようになることをも目指している。講述された手法を援用しながら、空間課題に対する解法を受講生自らが考え、その解法を図やスケッチ等で紙の上に表現してはじめて、デザインや計画の手法を実践できたと言える。そのため、毎回の授業を以下のような構成で行っている。

- 1) 目標とワークシート課題の提示
- 2) 課題を解くために必要な手法の講述
- 3) ワークシートの作成と採点

例えば、ランドスケープデザインの第9回(ヒトの場:都市の中に森をつくる)では、以下のような進行となる。冒頭に、都市住民の身体と心の居場所としての森の存在意義を説明し、森を創出する手法の習得を目標として掲げる。また、敷地(22m x 27m)が2つ描かれたワークシート(図-1)を配付し、「舗装用の板石とケヤキを敷地に配置して都市の中に森を創出する」という課題を提示して、まず一方の敷地に自力で配置図の作成を行ってもらおう。次に、森をテーマとしたランドスケープの作品群をスライドで紹介し、樹木と舗装材の配置による森の創出手法を講述する。その上で、もう一方の敷地に、講述した手法を応用して配置図を作成するように指示する。受講生がケヤキと板石の配置をワークシートに

描いている間に巡回し、質問に答えたり、必要なアドバイスをしたりする。おおよそ作業が完了した頃に、ワークシートの内容を一人ずつ確認し、評点を座席表に記入する。最後に、留意すべき事項を全員にフィードバックしたり、注目すべき作品を、作者に了解を得た上で、全員へ紹介したりしている。

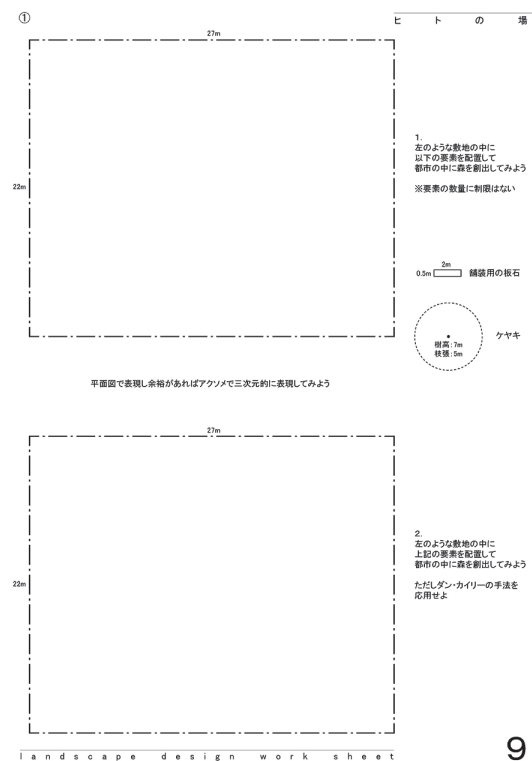


図-1. ワークシートの例(ランドスケープデザイン第9回)

受講生にとっては、ある意味、酷な授業であろう。冒頭の説明が重要なので、遅刻しないよう初回授業で注意しているが、必ず数人が遅刻する。遅刻して教室に入ると、全員が黙々と作業を行っている状況に遭遇することとなる。冒頭の説明を聞き逃しているので、何をしたらよいか全くわからないまま席につく。そのような受講生にも、できるかぎりのフォローを行っている。また、授業時間の大半で手を動かすことになるだけでなく、作業の進捗状況を教員によって繰り返し確認されるので、睡眠をとることができない(スライドショーによる講述をやめた理

由がここにある)。たまに、夢の中で描かれていると思われる、鉛筆のユニークな軌跡を、ワークシートの中に見出すことがある。その場合は、さりげなく目の前を往復したり、時には声をかけたりして、注意を促すことにしている。

## 2. 設計演習のサポートに徹すること

分野外の方々には理解されにくい点であるが、建築やランドスケープといった空間に関わる専門分野の教育では、設計演習がカリキュラムの中心に位置づけられる。特定の敷地と設計与件に対して、空間、時間、社会に関わる様々な条件を分析して提案の糸口を発見し、具体的な空間の形として解法を導き出し、それを他者にわかりやすく表現することを、設計演習で訓練する。受講生は、多方面の講義科目で習得した知識や技術を総動員して、設計演習の課題に取り組むことになる。入学から卒業まで一連の課題に取り組んだ経験は、建築設計という仕事に直接活かされるだけでなく、様々な場面での課題解決につながると思う。

このように重要な設計演習のサポート科目となるよう、以下のことを心がけている。まず、受講生が設計演習の課題に取り組める時間を、少しでも多く確保してあげることである。そのため、両科目では宿題や期末レポートを課さず、試験も行わない。授業時間内で採点まで終わるようにしている。

また、両科目で実践した手法を、設計演習の課題に応用してみるよう、受講生に指導している。授業時間内での基礎的な実践で終わっては、身につかないからである。設計演習の課題に取り組みながら、授業の復習をしてもらおうということである。

## 3. ランドスケープの作法がわかる建築の専門家を育てること

そもそも、造園やランドスケープ・アーキテクチャ等と呼ばれる専門領域は、歴史原論、自然科学、技術、計画、デザインといった様々な分野により構成される。そのため、ランドスケープの全てを両科目で網羅することは困難である。そもそも、本学科は建築の専門家を育てる所である。

したがって、ランドスケープの大系を順番に追っていくようなことはしない。そうではなく、建築や都市計画に関わりのある内容のうち、あるものをあ

るがままに活かすというランドスケープの作法が見えやすいテーマ(表-1)を選んで授業を構成している。

表-1. 両科目のテーマ (2016年度)

デ ザ イ ン ス ケ ー プ	三次元、動的平衡、視線と動線の連続性、曖昧性、樹木の基本、樹木の構成する空間、モルフォシス、ヒトの場、シークエンス、事象の顕在化、場所性、地形の操作、再生、脱構築
景 観 計 画	都市公園、パークシステム、グリーンインフラ、シナリオデザイン、京都ランドスケープデザイン展の各自見学、京都ランドスケープデザイン展の作品レビュー、ランドスケープ・エコロジー、オーバーレイ・メソッド、オルタナティブ・メソッド、文化的景観、山間部の景観、川の景観、湖岸の景観、沿岸域の景観、

このような授業をとおして、受講生の身についたランドスケープの作法が、将来の独自性の発露と活躍につながるのではと期待している。気候変動をはじめとする予測不可能な状況に直面する今日、建築の最前線では、生態系の一部として建築や都市をとらえようとする感覚が急速に浸透している。斬新な技術開発の進展にともない、建築と周辺環境との境目に変化が生じている。諸事象と真摯に対話しながら漸次的に環境を整える作法に、今後ますます熱い視線が注がれるであろう。